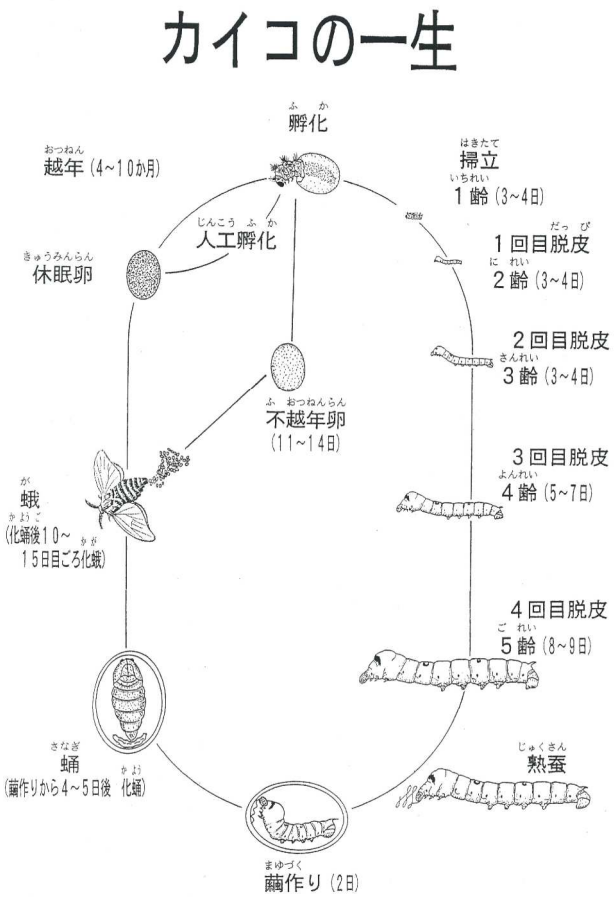
養蚕①

1. カイコの生態

カイコ（カイコガ）はチョウやガの仲間で、繭から絹を取るために家畜化された昆虫です。卵から生まれた幼虫は桑の葉を食べて、脱皮をくりかえして成長します。

カイコの発育段階を蚕齢といいます。孵化したものを1齢、最初の脱皮を終えたものを2齢、以後脱皮するたびに3齢、4齢と続き、通常5齢で成熟します。また脱皮前に桑を食べずに静止する時期を眠といいます。

5齢のカイコは8日ほど経つと桑を食べなくなり、体が透き通ってきます。この段階を5齢のなかでも特に熟蚕といいます。熟蚕は2日ほどかけて繭を作り、そのなかでさなぎになり、2週間ほど経つと成虫になります。成虫は繭に穴を開けて外に出るので、養蚕では中身がさなぎのうちに繭を回収します。



桑の葉を食べる5齢幼虫

繭を作る熟蚕

2.　大和の養蚕の歴史

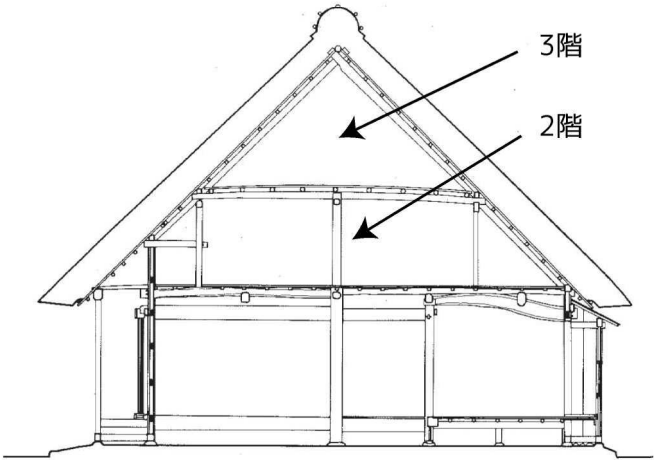
昔から人間は、カイコの繭（まゆ）から絹（きぬ）を取り、衣服などの素材として利用してきました。カイコを飼育して繭を生産する仕事を養蚕（ようさん）といいます。

文政9年（1826）2月の『深見村地誌取調帳』に「農間之稼　男者（は）縄をなひ　女者蚕少々飼申候」という記述があり、江戸時代後期には市域で養蚕が行われていたと考えられます。横浜開港にともなう生糸（きいと）の輸出を背景に、明治時代に入り養蚕は急速に市域に普及していきました。

市域の養蚕は明治20～30年代に最盛期を迎え、その後はやや下降気味になりました。第2次世界大戦中に食糧増産のために桑畑が開墾され、戦後は産業構造の変化や都市化の進行により養蚕農家が減り続け、平成6年（1994）に最後の1軒が養蚕を止めたことで市域の養蚕の歴史は幕を下ろしました。

3.　養蚕と大和の民家

かつては主屋で養蚕を行うことが一般的で、1階の部屋や屋根裏を使用していました。当園の旧北島家も養蚕仕様の主屋であり、屋根裏を蚕室として使用していました。屋根裏は2層構造で、通風や採光のために屋根の軒を高く切り上げて窓を設けてあります。1階部分の簀子（すのこ）天井も通風を考慮したものです。また主屋とは別に養蚕専用の建物（長家（ながや））を所有する家もありました。



旧北島家断面図

別棟の長家